（第三種郵便物認可）

スマート農業 茶園に

県が実証実験

牧之原 島田 AI、ロボで省力化

県は県内の茶生産者や企業と連携し、人工知能（AI）やロボット技術を活用したスマート農業の実証実験に乗り出す。牧之原市と島田市の茶園で生産管理の省力化につながる大型機械の自動操縦システムなどを導入し、2年間かけて効果を検証する。農家の高齢化や人手不足といった課題を先端技術で補い、生産性を向上させる。

農業・食品産業技術総合研究機構のプロジェクトの採択を受け、官民でつくる「県スマート茶業実証コンソーシアム」を設立した。9日に静岡市内で開いた初会合で、県は「茶園管理の作業時間を25%削減し、茶工場の荒茶販売額を10%拡大する」との目標を示した。

実証実験は牧之原市の農事組合法人茶夢茶夢ランド菅山園とエコグリーン勝間田、島田市のハラダ製茶農園と連携し、127㌶の茶園で実施する。二番茶の生産が本格化する6月から始める計画。

茶園にカメラを設置し、専用のアプリを使って離れた場所から茶の生育状況を確認できるようにする。茶を摘み取る時期を可視化したり、農作業をデータで記録したりして効率的な生産や収量アップにつなげる。

業界では急須で入れて飲む茶の需要が減り、農家所得の低迷が大きな課題となっている。一方で、緑茶ドリンクや抹茶原料の碾茶（てんちゃ）需要は拡大し、コンソーシアムは産地を維持するためには品質と生産量の安定化が不可欠とみる。

県は「スマート農業の導入で省力化や生産性向上を図り、現場に普及させたい」（お茶振興課）としている。

（経済部・森田憲吾）

スマート農業 ロボット技術や情報通信技術（ICT）などを活用し、省力化や大規模生産、品質向上を目指す次世代農業。スマートは「賢い」との意味。農家が蓄積したデータを共有することで競争力を強化し、新規就農者を呼び込む狙いもある。政府は2025年までに、ほぼ全ての担い手がデータを活用した農業を実践するとの目標を掲げている。農業・食品産業技術総合研究機構のプロジェクトには全国から252件の提案があり、露地野菜や施設園芸、果樹、畜産など69件が採択された。

静岡商議所に「地域人事部」

人材確保支援強化

静岡商工会議所は11日、地元企業の人材確保を支援する部門「地域人事部」を新設した。人手不足が深刻化する中、女性、高齢者など多様な人材を活用して地元企業の経営課題の解決につなげる。

静岡市葵区の同商議所静岡事務所近隣のビル内に事務所を設け、職員12人が対応する。「UIJターン」といった若者の地元就職の促進や、高度な専門知識や技術を持つ人材を県内に呼び込む「県プロフェッショナル人材戦略拠点」事業などを展開する。

社会人メンターとの交流会開催、企業訪問、中

「産業用ロボ市場広がる」

しずおか経営戦略セミナー アイエイアイ社長 展望

しずおか経営戦略セミナー（静岡新聞社・静岡放送、県中部未来懇話会主催）第35期の第8回講座が11日、静岡市葵区で開かれた。小型産業用ロボットメーカー、アイエイアイ（静岡市清水区）の石田徹社長が講演し、今後の産業用ロボット需要について「少子高齢化で自動化機械のマーケットは広がる」との見方を示した。

石田社長は1976年の起業から「単軸・直交型ロボット」分野で国内シェアの過半を握るまでの経緯を紹介。「品質を良くすることにエ

った」と振

計スタッフ

への投資を

したと説

誘客拡大へ連携確認

県中部地区観光連絡協 業者間で情報交換

県中部の宿泊、観光施設や物産店、運輸事業者でつくる県中部地区観光連絡協議会の情報交換会が10日夜、焼津市で開かれた。大型観光企画・デスティネーションキャンペーン（DC）や中部横断自動車道の県内区間開通などの影響を踏まえた近況を相互に報告。圏域一体での観光客受け入れに向け、連携していく方針を確認した。

1日から始まったDCに関しては「JRのプロモーションで施設が取り上げられ、効果を見込んでいる」（運輸）、「DCのロゴの入ったパンフレットを持参する個人客がみられる」（観光施設）などの説明があった。

一方で、「DCがスタートしても厳しい」（運輸）といった声も多く、施設によって手応えが異なっている実情も浮かんだ。焼津市内の宿泊施設は焼津港でマグロのセリを見学して朝食をとるDC限定商品を挙げ、「非常に活気のある市場を見ることができ、面白い。販売に力を入れたい」と今後の取り込みに意欲を示した。

27日からの10連休は総じて順調な客足を見込むが、「連休明けはほとんど予約が入っていない。忙しい日と、忙しくない日が両極端だ」（宿泊施設）との指摘も。中部横断自動車道に対しては、山梨県や長野県方面からの誘客拡大につながるとの期待が聞かれた。

同協議会の森徹会長（焼津さかなセンター事業部長）はDCなどの追い風を生かすためにも、「各施設が知恵を絞りながらタッグを組み、点から線、線から面となって観光客を呼び込んでいく必要がある」と述べた。

（経済部・関本豪）

島根・雲南市の課題解決へ

ヤマハ発 4者包括協

ヤマハ発動機は11日、島根・雲南市の地域課題解決を目指す包括連携協定を、同市と竹中工務店、NPO法人エティックの4者で締結したと発表した。各社が持つ技術やサービスを結集し、過疎や高齢化など地方が直面する課題解決や地域活性化に取り組む。

雲南市は「ソーシャルチャレンジバレー」と称し、子どもや若者など住民参加型の地域創生活動を推進している。今回

企業や団体

課題解決

たな枠組

者の強み

イデアを

る。

ヤマハ発

通課題解決

同社の電動

貸与や技術

イスを行う

経済しずおか

静岡ものづくり最前線

シートベルトセンサー

メディカルプロジェクト（静岡市葵区）

呼吸や脈拍を検知するシートベルトセンサー（パット型）

運転手の異変 早期検知

自動車のシートベルトに取り付けて、運転中のドライバーの呼吸や脈拍を検知するセンサーを開発した。意識喪失などの体調異変や居眠りなどを早期に検知し、事故防止につなげる。

呼吸や脈拍から派生する微小な動きを空圧センサーでとらえる。カーナビゲーションなどとつなぎ、分単位の呼吸や脈拍数を画面の波形に即時出力する。センサーの取り付け部はパット型など3タイプを用意した。

これまでに開発したベッド下に据える離床検知センサーや、浴槽内での健康状態の見守りセンサー技術を応用した。カメラなどで居眠りなどを検知する機器はあるが、ベルトに付帯したセンサーを介して覚知するタイプの製品はないという。走行中の路面振動といった影響除去など、検知機能の精度向上へ研究を重ねている。

実用化には、運転を強制的にストップする自動ブレーキや、運転手に警告するアラーム機能などとの連動が必要になるため、完成車や部品メーカーに試験機を販売中。走行を管理するバスやタクシー会社などにも販路を広げたい考えだ。

森典昭社長は「自動車も医療用も人命を守るという発想の根幹は同じ。課題を克服し、輸送機器市場に提供したい」と話す。

企業情報 1982年設立。医療機器、医療用製品の開発販売。静岡市葵区大鋸町1の12。従業員18人。

23日新茶初

JA大井川茶業協議会藤枝支部は11日、茶業センター藤枝工場（藤枝市堀之内）の今季の新茶初取引を23日に決めた。市場関係者と生産者らによる協議で判断した。藤枝工場によると、昨年の初取引より5日遅い。

気温が高かった昨年に比べると生育状況は遅いが、ほぼ例年並みという。藤

当者は「良

月夜の

掛川

掛川茶振

夜に掛川市

開催する「

会」の参加

る。「満月

お茶はおい